

本書は、最近よく耳にする「生物多様性」についての解説書である。生物多様性を「種の多様性」「種内の多様性」「生態系の多様性」の3つの観点から、その恩恵について述べる。一方、現在を人間の活動を原因とする6度目の大量絶滅時代のまっただ中として、生態系が急速に劣化していることに警笛をならす。著者は、その原因として外来生物の脅威、生態系のアンバランス、人為的気候変動を挙げ、生態系保全の方策として、生態系ホットスポットの保全、湿地の保全、複合的な影響への対処、「新たなヒトと自然との共生システム」の開発が重要であり、市民・企業・行政の役割を説くとともに、市民主体、地域主体の「自然再生」の取組を紹介する。

本書が紹介する「生物多様性」について、次の3点より考察を加えたい。1つ目に人為的生態系のアンバランスに関して、2つ目に外来種の定義について、3つ目に自然再生と経済についてである。

1つ目の人為的生態系のアンバランスの1つに奈良公園のシカの問題がある。奈良公園のシカは、「奈良の鹿」として1957年に国の天然記念物に指定されている。奈良のシカは767年に創建された春日大社の第1神タケミカヅチノミコトが白鹿に乗って鹿島から来られたという騎鹿信仰説話を元に、その後事実上の守護職であった興福寺によって、興福寺・春日社の権威や正当性の保持のために、厳重に保護されてきた。このように、奈良ではヒトとシカが1200年以上にわたって共生してきた歴史があるのだが、増えすぎたシカによる食害については、1970年代の白毫寺地区の農家による鹿害訴訟がその始まりであり、その後の観光ブームとの関わりが大きい。著者が指摘するシカの個体群増加の原因に、観光・経済効果など人為的原因を追加するべきであろう。

2つ目の外来種の定義についてである。著者は「もともとその生態系に含まれていなかった生物」を外来種として、意図的あるいは意図せず人間によって持ち込まれ、「生態的に解放」されているために、同じような環境の要求性をもつ在来種との競争に強いと指摘する。この「もともと」というのはどの時代と解釈すればよいのであろうか。我々が毎日食べている野菜は、そのほとんどが外来種である。それらも駆除すべき対象であるとすれば、我々の食生活は貧しいものとなる。駆除すべき外来種とそうでない外来種の境界が明確でない。人間中心に境界線を引いてよいものかどうか、判断に困難を感じる。

3つ目の「自然再生」についてである。著者は各省が独自に進める自然再生事業を150カ所以上数えることが出来ると述べているが、「各省」が進める事業とは換言すれば助成金頼みの取組ということである。よい取組であっても助成金がなくなると取組が継続されないという傾向が強い。「自然再生」が経済効果を生むことができれば持続することもできるであろうが、善意だけのボランティアでは継続も拡大も困難であろう。

人間にとってはもちろん、生物自身にとっても生物多様性の保全は重要である。そして生物多様性の保全を阻む原因が人間活動である以上、保全も人間活動によって実行されなければならない。多くの人の行動を変革するには、教育による意識化も重要だが、「損得勘定」という、現代のすべての人の意識を規定する経済至上主義に訴えかけることが効果的である。生物多様性の保全によい取組をするに経済効果があり、逆の取組には罰金を科すぐらいの姿勢で臨む。キレイゴトだけでは、危機的状況を乗り越えることが出来ないのではないかと思う。